

「未来の担い手育成プログラム研究指定校」事業報告書（3年次）

1 学校名等

学 校 名	京田辺市立 大住中学校				校長名	森本 克美	
研 究 主 題	「学びが変わる」「子どもが変わる」「学校が変わる」課題解決型の学習の充実						
研究の目的	<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決型の学習を通して、生徒の学びの深化・発展を図る。 【学びが変わる】 ・iPS研究所との連携による、質の高い知識・論理的思考力・協調性・知的好奇心等を一体的に育成する。 【子どもが変わる】 ・これまでの総合的な学習の時間を課題解決型の学習を軸として展開し、その視点を教科学習の指導改善や道徳科の指導力向上に波及させ、教職員が新たな学びを創造することにつなげる。 【学校が変わる】 						
学 年	1年	2年	3年	特別支援	合 計	教職員数 ※校長・教頭を含む	
学 級 数	6	6	6	2	20	47	
生 徒 数	236	219	240	11	706		

2 研究校の概要

本校の現状としては、全国学力・学習状況調査の結果等から、「各教科の合計点」は相対的に高い状況にあるといえる。

ただし、データの分析をすすめると、「情報を整理したり、整理した情報を自身の言葉で表現したりすることの苦手さ」が見えてくる。以下にその根拠となり得るデータを紹介する。

令和4年度の国語科の調査では、平均正答率が全国平均や府平均を5ポイント上回っていることに対して、「書くこと」の平均正答率が5ポイント以上低くなっている。この「書くこと」に関する問題は、本文について自身の考えを述べる問題で、解答の際には3つの条件を満たしたうえでの解答が必要なものである。【表1】

【表1】令和4年度全国学力・学習状況調査(国語)

分類	区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
			貴校	京都府(公立)	全国(公立)
全体		14	74	69	69.0
学習指導 要領の 内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使いに関する事項	81.1	72.7	72.2
		(2) 情報の扱い方に関する事項	39.8	45.7	46.5
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	70.3	70.4	70.2
	思考力、判断力、 表現力等	A 話すこと・聞くこと	74.2	65.8	63.9
		B 書くこと	39.8	45.7	46.5
C 読むこと		73.2	68.7	67.9	
評価の観点	知識・技能	10	73.8	69.3	69.0
	思考・判断・表現	6	68.2	63.4	62.3
	主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式	選択式	6	76.7	74.2	73.7
	短答式	5	77.9	70.2	70.3
	記述式	3	63.2	58.9	57.4

上記のような理由から「情報を整理したり、整理した情報を自身の言葉で表現したりすることの苦手さ」を組織的に克服していくための取組を行うことにした。

3 主な研究活動

本校は令和4年度より、京都府の「未来の担い手育成プログラム」事業の指定校としての取組をスタートした。「未来の担い手育成プログラム」指定校は毎年2月に実施される「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」へ参加する。

「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」の趣旨は【企業等から出題される「正解のない問い」を解決しようとする、課題解決型の学習に取り組むことや各学校が設定している「探究課題」について探究的に学ぶことにより、自らの学びが社会とつながることを実感したり、社会に貢献したりする課程を体感する中で、認知能力と非認知能力を一体的に育む(実施要項より)】というもので、本校は令和4年度から令和6年度までの3年間、2年生においてこのコンテストへの参加を軸とした取組を実施した。また、この取組における本校の協力機関として「CiRA(京都大学 iPS 細胞研究所)」が設定されており、このCiRAの「誰もが安心してiPS細胞を用いた治療を受けられるようになるには、どのようなことが必要だろうか？」の問いを与えられた生徒たちが、各クラス6～7名程度のグループに別れて、課題解決型の学習に取り組んだ。

「年間スケジュール」

番号	時期	取組内容
ア	4・5月頃～	各機関担当者打ち合わせ(教育委員会、教育局、学校、CiRA)
イ	7月頃～	iPS細胞に関する基礎知識を学習 (個別探究⇒グループ交流)
ウ	9月頃～	プロジェクトリーダーの募集・任命 プロジェクトチームの結成
エ	9月中頃	iPS細胞研究者による講演・質問会
オ	9月末頃～	「問い」に対するグループ探究+プレゼン資料作成開始
カ	10月頃	中間発表会
キ	11～12月頃	学級発表会/学年発表会
ク	1月	代表グループの発表内容の推敲
ケ	2月	「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」への参加・発表



↑プロジェクトリーダー会の様子



↑クラス発表会の様子

4 今年度の研究の成果と検証

毎年、「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」に参加することで、他校の取組との比較ができ、自校の探究活動の見直しを図ることができた。昨年度に引き続き、本事業への取組に対する生徒アンケートを実施した。その中でも「取組を通じて課題解決力が成長したと感じますか?」「取組を通じてコミュニケーション力が成長したと感じますか?」「取組を通じてプレゼンテーション力が成長したと感じますか?」の問いに対しては主観的な回答であるとはいえ、すべての項目で85%以上の肯定的な回答を得ることができた。今年度の取組を多くの生徒が「自分自身の成長につながった」ととらえていることは、ひとつの成果といえる。

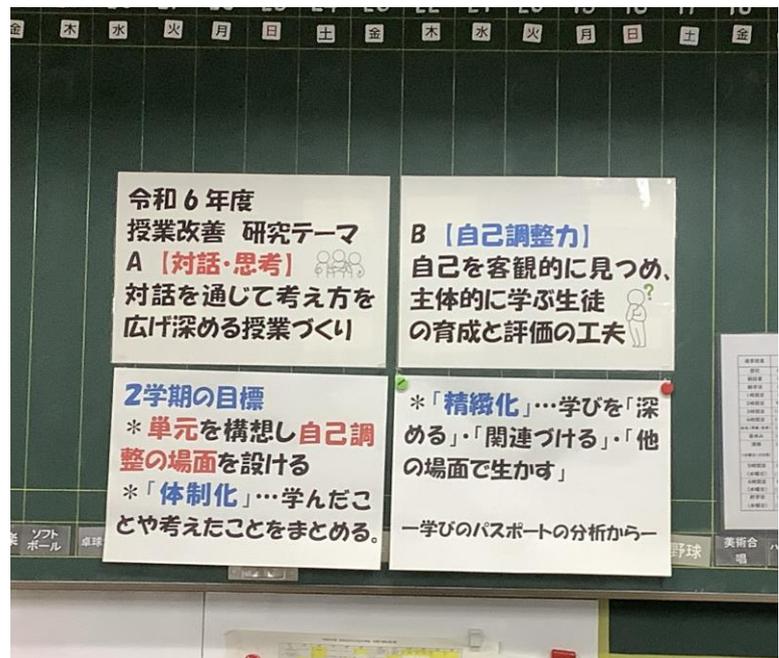
また、プロジェクトリーダー向けの質問である「プロジェクトリーダーの役割を通じて、様々な点で成長することができたと感じますか?」の問いについては90%以上の生徒が肯定的な回答をしていた。これらのことから、研究の目的で示したように、[学びが変わる]ことで[子どもが変わる]ことを実感することができた。

5 今年度の課題

3年間の取組を振り返って、課題であったと感じる点が複数あった。1つ目は、前年度からも、難しさを感じながら取り組んできた日程の部分である。今年度も年度の早い段階から日程を調整して取り組みを進めてはいたが、課題解決の開始から中間発表までの期間がどうしてもタイトな日程になってしまった。その影響もあって中間発表会での発表内容には、事実誤認を含む多くの改善点が出る結果になってしまい、整理・分析した内容をじっくり検証することができなかった。2つ目に、昨年度の2年生の参考作品を事前に示したところ、プレゼンテーションの構成がテンプレート的に活用されてしまい、多様性に欠けてしまったという点があげられる。例示するグループの数を増やして、多様なイメージを創造できるよう仕掛けるべきだったという反省点があがった。

6 事業終了後の研究構想

令和4年度の取組開始時に設定した長期目標として、教職員全体で課題解決型の学習についての研鑽を深め、各教科での取組につなげていこうというものがあった。ただし、令和4年度、令和5年度と取組を推進していく中で、教科性の違いなどから難しさが生じてくる場面があった。例えば、「外部機関の協力を得て取り組む難しさ」や教科のカリキュラムの中に「課題解決型の学習形態を組み込む余裕のなさ」が挙げられる。そういった状況の中、本校では「情報を整理したり、整理した情報を自身の言葉で表現したりすることの苦手さ」という本校生徒の課題について再度職員研修を通じて改めて見直した。学んだことや考えたことをまとめる「体制化」や、学びを「深める」「関連付ける」「他の場面で活かす」と



いった「**精緻化**」の能力を意識的につけさせることで上記の課題を克服できるのではないかという仮説を改めて設定し、教職員全体として校内授業研や日々の授業を通じた授業改善に取り組んできた。現在は今年度の取組を振り返り、次年度以降のテーマの方向性を定めていく時期である。教職員全体で一定の方向性を持ち、組織的に授業改善を図っていく。